

## 図書館の利用状況について

図書館の資料管理である延滞、督促の対応状況についてと、新型コロナウイルス感染症の拡大から3年が経過したところでの図書館の貸出点数の状況について分析を試みた。

## (1) 延滞資料への督促対応状況について

2009年3月31日と2022年10月18日時点での貸出資料の内の延滞資料の状況を調査した。

延滞資料の状況分析

	2022/10/18 時点	2009/3/31 時点
総延滞点数	8,585	55,024
蔵書点数	1,004,281	883,687
延滞/蔵書	0.9%	6.2%
内 2 週過	5,526	18,702
2w/延滞	64.4%	34.0%
内 4 週過	6,971	32,296
4w/延滞	81.2%	58.7%
内 2 か月過	7,645	39,615
2月/延滞	89.1%	72.0%
内 4 か月過	7,760	44,273
4月/延滞	90.4%	80.5%
内 6 か月過	7,797	46,353
6月/延滞	90.8%	84.2%

2009年では、延滞資料数が蔵書の6.2%であったが、2022年では、0.9%と、比率においても1/6、点数においても1/6になっている。

また、延滞日数についても、延滞資料の8割が返却されるまでの期間が2009年では、4か月かかっているが、2022年では、1か月かかっていない。

**【図書館の対策】** 2007年9月に貸出点数制限を開始し、延滞があると返却されるまで新たな予約を受け付けず、また、延滞1か月以上の資料がある場合、自動貸出機での新たな貸出はさせず、カウンターで対面して延滞資料について確認することとしており、この「ペナルティ」に効果があると捉えている。延滞のある利用者で、その後来館がなく複数回督促しても返却しない者については、上記の「ペナルティ」の効果が見込めない。

**【長期延滞者について】** 除籍基準に基づき実施している5年以上の期限過ぎ（長期延滞）による除籍資料は、2009年度で約500点であったが、2022年度は150点と1/3に減っている。延滞をゼロにすることは困難と考えるが、延滞資料については、予約があれば購入や相互貸借による資料提供により利用者に不便とならないように対応している。

## (2) 貸出点数の推移と要因分析について

コロナ禍による図書館利用減について 2021 年度と 2017 年度の利用統計を比較、検討を行った。

①【貸出点数の推移】2013 年 7 月に公津の杜分館が開館してから貸出点数は伸びている。2015 年度をピークに、対前年度比約 97.5%割合で毎年度貸出点数が落ちている。コロナ禍関係なく、貸出減の傾向の内に 2021 年度統計もあると分析することも可能である。

貸出点数の推移

年度	貸出点数	※
2021	1,117,560	1,143,150
2020	972,282	1,172,462
2019	1,172,821	1,202,525
2018	1,231,414	1,233,359
2017	1,260,741	1,264,983
2016	1,293,904	1,297,419
2015	1,330,686	
2014	1,319,824	
2013	1,320,586	

※2015 年度分から毎年度 97.5%減とした場合の貸出点数

②【市民登録率】市民登録率は、コロナ禍前 29%くらいから 22%に落ちて回復していない。利用者は、コンスタントに利用される方だけでなく、登録時に 1 度使ったきりの方や、毎年 1 回くらいの利用の方もおり、その利用者の登録割合や、コロナ禍でその数が落ちている可能性がある。

市民登録率

年度	市民登録率
2021	22.3%
2020	23.6%
2019	28.0%
2018	28.9%
2017	29.2%

③【貸出点数】コロナ禍後の 2021 年度の貸出点数は、全館合計で見ると 2017 年度の 9 割には回復してきている。館ごとにみると公津、久住、八生、三里塚、下総の貸出点数は 2017 年度比で 110~130%増となっている。また、2017 年度貸出点数に回復している割合は、本館よりも公津の杜の方が高い傾向である。このことから、利用者は、資料が多い本館に行くことを減らして、インターネット予約により近くの分館・図書室を利用しているという予想ができる。

【予約処理件数】予約処理件数は、各受取館において毎年度伸びている。受取館単位の割合では、公津、加良部、八生、三里塚、下総は伸びが高い。

【本館の地区別貸出点数】公津、久住、八生、三里塚、下総の貸出点数が伸びているため、本館での地区別の貸出点数において、ニュータウン地区とそれ以外の地区では回復している割合が違う可能性があるが、本館の地区別の貸出点数については、八生を除きニュータウン地区を始めとする全ての地区でまんべんなく貸出点数は落ちていて、明確な差はみられない。

- ④【入館者数】入館者数は貸出利用者数よりも多く、図書館には貸出だけでなく、調べものやインターネット情報アクセス、新聞雑誌閲覧等多くの利用者に利用されている。入館者数を分析すると、本館、公津の杜、成田では、貸出点数と同程度に回復してきている（2018年度比）。しかし、2018年度と2021年度で【入館者数／貸出利用者数】の割合を比較すると、入館者数の割合が落ちているのが分かる。

入館者数／貸出利用者数

年度	本館	公津の杜	成田
2021	136%	185%	209%
2020	133%	147%	205%
2019	152%	200%	252%
2018	151%	208%	260%

⑤まとめ

①にあるように利用減傾向があり、これは本市の少子高齢化による影響と、情報の多メディア化による影響が予想される。

②の市民登録率は、「成田市立図書館サービス計画」の指標にしているように、図書館サービスを全市民への提供していく重要な指標であり、詳しい分析が必要であり課題である。

③コロナ禍によりインターネット予約を通して近くの分館・図書室で利用する傾向が続くのであれば、本館で書架をブラウズして本を借りるということがなくなるため、貸出減傾向は変わらない可能性がある。

④にあるように、コロナ禍により出歩くのを避けるため、来館して読書等で過ごす人も減っている可能性はある。

公共図書館は、市民の生涯学習の拠点の一つであり、市民の読書習慣の確立と、多様な資料の提供、読書や情報収集の場の提供を積極的に行っていくことが望まれており、図書館でも安全に過ごすことができる環境を維持しながら、利用したくなる図書館広報が必要と考える。